



## 私の歩いた道

——国語科単元開発への挑戦——

米田 猛

### 一 奈良教育大学と私とのつながり

棚橋先生、過分なご紹介ありがとうございました。また、橋本講座主任先生はじめ、国語教育講座の先生方、私にこういう機会を与えてくださいます、ありがとうございます。

改めて、皆さんこんにちは。

今年度末(二〇二四年三月)をもって教育関係、教職生活から引退しますものですから、まあ言ってみれば、今日のお話は生前葬講演会みたいなものであります。

一応ごらんのようなタイトルをつけました。前半の三分の一ほど、この主タイトルの話をして、残り三分の二を国語科単元開発への挑戦ということでお話をしようと思います。

お手元にあるパワポのハンドアウトはこの後半の部分だけなので、前半部分についてはこの画面を見ながら聞いてくださったら助

かります。というのは前半部分は個人情報満載なので、皆さんにお渡しすることはできません。どうぞこちらをご覧ください。前半の方がずっと面白いですよ。では始めます。

私と奈良教育大学とのつながりを年表にしてみました。

まずは、附属中学校の生徒です。三年間学びました。下は当時の写真です。生間学びですね。帽子を「アマダにかぶる」って分かりますか。今はこんな帽子をかぶっている生徒はいません。生意気な中学生です。

それから、次がここ(奈良教育大学)ですね。学生時代をここで四年間過ごしました。当然、教育実習も附属中学校へ行きました。その次が、附属中学校教員として九年間、附属中学校で過ごしました。右がその時の写真です



ね。今とあまり変わりませぬ。昔から年寄り顔だったということ  
です。

そして現在の奈良教育大学の教員。これは、実物がここにいろ  
のいいと思います。

こんなふうにして、私と奈良教育大学というのは、不思議な  
でつながっております。

## 二 私の特性

今回こういうお話をさせていた  
にありましてですね、自分という  
のをもう一回見つめ直そうと思  
た。七十年を振り返るにあた  
よつと冷静に自分を眺めてみ  
ました。

それで、私の特性なんですけど、  
つばいあるんですけどね。皆  
れから示しますから、そうだ  
思うことがいっぱいあると思  
います。

これ（抽象的な論議に弱い）は、  
緒に仕事した方は分かっている  
ます。だんだんめんどくさくな

### 教員(実践者・研究者)としての私の特性

【マイナス面】-たくさんあるが、ほんの一部だけ。

- ✓とにかく**抽象的な論議に弱い**。よって、複雑な論議にも弱い。
- ✓疑い深い。引用・参考文献は原著を見ないと我儘できない。
- ✓世の変化についていけない。そのくせ、あきらめが悪い。……などなど

【プラス面】-あまりない。

- 単純作業を延々とできる。
- 一つのテーマにこだわりをもつ。
- 他人が気付かないことに**気付く**。→ときにマイナス。トラブルの元。

ひょっとしたら大学時代の  
卒論が私の性格形成に  
影響を与えているかも？

て「もういいや」ということがあったので。

それから、これ（疑い深い）ね。特に卒論指導している人なんか  
は、これをずいぶん言われると思います。孫引きは絶対だめです  
けど、孫引きなんかしたら、本当に原著を見たの、とよく言いま  
す。それからこれ（世の変化についていけない）は年のせいだと思  
いますが、仕方ないですね。

二つめの「疑い深い」ことの一つの証明として、これを見てくだ  
さい。これ何だか分かりますか。ほとんどコレクションですよ。

「図書館の利用カード」です。このへんはいいとして、東大寺書  
館など、あまりなじみのない図書館の利用カードも持っています。

語学や文学をなさる方は、天理図書館はその関係の蔵書が多いので、  
利用なさつたらいいと思います。

それから県内各地の公立図書館の  
利用カード。これは大阪府立図書館  
ですね。大阪府まで進出しています。

大阪府まで進出して、原著、原論文  
を見ないと信用できないというか、  
そういうところがあります。

市町村の図書館も結構「地域コー  
ナー」などが充実していて、例えば  
桜井市立図書館は「万葉集」関係が  
いっぱいあるんですね。皆さんもそ  
ういう地域の図書館を利用なさつ



て、調べられるのもいいことだと思いますね。このようにカードコ  
レクションをなさるといいと思います。

話を元に戻します。  
私の特性は他にもいっぱいありますが、ではこつち（単純作業が  
延々とできる、一つのテーマにこだわりを持つ）へ。どうでしょう  
か。これには後で申します卒業論文がちよつと関わっています。

それから、これ（他人が気付かないことに気付く）ね。これはマ  
イナスかも知れませんが。私は昔から、「その一言がなければ、お前  
はいい奴だ。」とずつと言われ続けてきたのだけれど、一言多いた  
めにトラブルを招くことが、多々というほどでもないけれど、何回  
かありました。

私、今になって思うんですけど、このような特性は、これ（卒論  
の影響）かもしれないと思っっているんですね。後でこの話はします。  
どういふ卒論を書いたのという話です。

特に、単純作業を延々とできるとか、一つのテーマにこだわりを  
持つのは、多分大学時代の卒論で培われたものかなというふうに思  
っています。

### 三 私の学生時代

ここで、私の中学、高校、大学時代を振り返ってみますね。学生  
の皆さんにはあまり参考にならないかもしれませんが。

まず、中学校二年生の衝撃的な体験。「短歌の創作」でしたが、

私の作った短歌が先生に酷評されたんです。みんなで短歌の創作を  
して、当時四十六人学級ですけどね、黒板に書いて投票するんです  
ね。私の短歌に、五票入ったんですよ。四十六票中五票も入って、  
うれしかったんです。すごうれしかったんです。

先生はその酷評以後、「創作には絶対手を染めないぞ。」と思いま  
したね。文学に関しても、もちろん教員だったら文学的な文章を教  
える仕事をしなきゃならないから、そんなこと言っていられないん  
ですけども、どうも苦手だなとい  
う意識はありました。今でもその  
先生の言葉ははつきり覚えていま  
す。教師の言葉って大きな影響を  
与えますね。

それから、高校の時。実はこう  
（新聞記者に憧れる）なんです。

若いから社会に対するいろいろな  
不満とかがあって、新聞記者にな  
ったら、そういうのを斬れるかも  
しれんなと思っただんですね。今は  
新聞記者も、パソコンやスマホで  
原稿を送ると思いますが、当時は  
こんな長い細い原稿用紙に、鉛筆  
でサアーツと書いています。そのド  
ラマを見てかっこいいなと思っ

#### わりあい無邪気な進路選択①

- ◆中学校2年……国語の時間に「創作短歌」を酷評され、**国語が嫌い**になる。  
特に「文学」や「創作」はセンスがない。
- ◆高校時代……**新聞記者に憧れる**。小さな原稿用紙に、鉛筆で荒っぽく記事を書いている記者に「かっこよさ」を感じる。時間に追われている感じも「働いている」感が魅力。社会を斬るのもかっこいい。
- ◆大学選択……一方で、「青春ドラマ」（これが青春だー竜雷太主演）の主人公に憧れ、**教員も選択の視野に入る**が、教科を決められない。理科系はからっきしダメ。芸術系はそんなセンスなし。最後は、体育系と文科系（ただし、社会学・世界史はどこの国の事件か皆目見当がつかない。英語はガラじゃない。）

というわけで、消去法で国語に決めました。

んですね。

では大学はどうするということになります。これ(青春ドラマ「これが青春だ」)を覚えてる方、何人ぐらいいらっしゃいますかね。だいたい、竜雷太つてどの俳優さんなんや、つて話ですよ。ご存知ですか。だいたい同年代の方はご存知なんですが、これね、かつこよかつたのね。でもね、現実は全然違うんです。ドラマと全然違うんだけど、こういうことであります。ところが、大学に入るにあたつてどの教科にする、ということになったわけですが、ここに書いたとおりです。

じゃあどうするか、消去法なんです。だからね、人生つてわからないですよ。消去法で決めた教科で、今仕事をしているということね、本当にわからないなと自分でも思います。

それから、大学に入りましたけど、当時、奈良教育大学中学校教員養成課程文科国語つて言ったんですね。文科国語には、これもどいういう巡り合わせか、実は当時の合格発表つて、受験番号だけじゃなくて、名前も出るんですよ。名前を見て男性二人、女性五人とつて入学式の日を集まつたら、一対六だったんですね。もうびつくりして。一人の女性の名前が男性の名前だとばかり思い込んでいて、人数数えたら、合わないんですね。おかしいなと思って自己紹介したら、思わぬ読み方をしたのだから、男の人だと思つたのが実は女性だったということです。だから、授業では必ず対角線上の席を、つまり、彼女らからは一番遠い距離の席を確保しまして、やつぱり来年別の大学を受けようかな、と本気で思つたものであります。

す。したがつて、サッカー部の部室に入り浸りということになりました。

それから、ここにいらつしやる学生の皆様はこんなことはないと思います。大学二回生で初めてレポートというものを真面目に書いてたんですね。教養教育もいっぱい受けてレポートを書いているんだけど、全然記憶がなくてね。初めてレポートを真面目に書いたんです。

そこで出会つたのが、鈴木一男先生です。本学の名誉教授です。何をレポートに書いたかという、ちよつと見てください。何だこれ、ですよ。『古事記上巻抄』という資料なんです。漢文です。そして、ご覧のとおり、読み仮名が片仮名で書いてありますね。



国立国会図書館デジタルコレクションより

だから大体読めるんですが、ただ片仮名は当時の字体で書いてあるので、そこは多少の苦労があるけど、これを訓読するのはそんなに難しいことではない。

鈴木先生は、後で申しますが、訓点資料、正倉院の訓点資料を扱っていらつしやつたわけですけども、その入り口として、まだ学生ですから、そんなに難しいのは無理だから、これは資料的には非常に短いですし、振り仮名がいつぱい付いていますから、何の問題もないので、訓読文を作りなさいとおっしゃつたわけですね。それから仮名字体表、片仮名がありますよね。仮名字体表を作りなさいと、そして問題点を指摘しなさい、というレポートを出されたんですね。

ここがやはり一つの分岐点、私の分岐点なんですね。

そして、三回生になつていよいよ、学生の皆さんも一緒ですが、研究室、ゼミ選択がありますよね。次の鈴木先生の言葉、皆さんどう思いますか？ トリックだと思いませんか？「男性はみんな私の研究室へ来るんですよ。」とおっしゃつたんですね。

違うんですよ、事実。そこを選ぶのはみんな男性であつて、男性がみんな選ぶわけじゃないんですね。

私が聞き間違つたのか、鈴木先生がわざとそのようにおっしゃつたのかは定かではありませんが、私はそのように記憶しています。だから当時は純粹でしたから、「そうか、男はみんな鈴木先生のところへ行くんだ。」と思つて、何の迷いもなく選んでいるんです。何も考えなくて選んでいるんです。でも、その言葉が私を学問の世

界へ導く素晴らしい出会いでした。

皆さん、ゼミ選択、相当考えられますよね。研究室訪問をして考えられますけど、私、何の迷いもなく選んだんです。

それから、附属中学校での教育実習。巳野欣一先生との出会い、初めてじゃなく、中学校時代に出会っているけれど、教員の卵として出会つたのは初めてです。(先ほど述べた私の短歌を酷評した先生ではありません、念のため。)

これも、人生に大きな影響を及ぼした素晴らしい出会いでしたね。

当時の指導案というのは、B4の縦書きの大きい紙で、それに書いた指導案を持って、初めて授業するものですから、「巳野先生、教えてください。ご指導ください。」といくわけですね。

全ての行にチェックが入るといふ結果でした。「巳野先生、これどこがどうなんでしょうか」と問うたら、「自分で考えなさい。」とひとこと。

しかも、実習ではあまりしたことがないという「文法」をや

### わりあい無邪気な進路選択②

- ◆大学1年……国語科1回生、女性6人、男は1人。これは、来年、別の大学を受験し直そうと本気で考える。教室では、女性6人と必ず対角線上の席を確保。部活(サークル活動)に命を懸ける。1回生からレギュラー確保。
- ◆大学2年後期……初めてまじめにレポートを書く。400字詰めで50枚ほど。題目は「古事記上巻抄について」。
- ◆鈴木一男先生との出会い。訓点資料との出会い。
- ◆大学3年……研究室選択。鈴木先生の「男性は、みんな私の研究室へ来ます。」という言葉信じ、鈴木研究室を選択。だが、それは言葉のトリックで「鈴木研究室を選ぶのは、みんな男性。」が真実。
- ◆大学3年……附属中学校で教育実習。教育実習史上初めて「文法」をすることとなる。人生で初めての指導案は、全ての行に赤いチェックが入った。
- ◆巳野欣一先生との出会い。鈴木先生と巳野先生の策略であつたような……。

りなさいと。私だけでなく、一年生を受け持った実習生が、五人か六人かいましたけれども、後で聞くと、どうもこれ（鈴木先生と曰野先生の合意）であった。そうなのか。どうもこのへんからその方向になってきますね。

そして四回生です。「どうする、卒論」。全然疑わずに鈴木先生の研究室に行ってますし、そういうのを扱うものだと思うので、「君、東大寺図書館にある資料を扱ったらどうかね。」と言われて、鈴木先生にご紹介いただいて東大寺図書館に行つたんですが、大事な資料なので、原本調査は館長室でしか許されません。しかも巻物でありますから、広げるのはいいんですが、今度巻き戻すとき、ずれていくでしょう。ずれてトントンなどやろうものなら、ついているヲコト点（ヨコト）が剥がれ落ちて大変なことになるわけですね。だから慎重に。でも、館長さん、イラッとしたでしょう

### わりあい無邪気な進路選択③

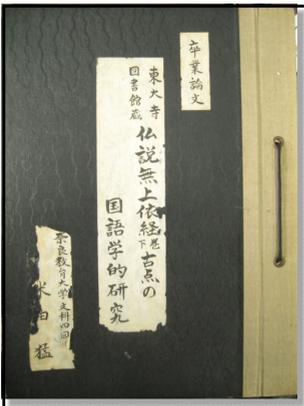
- ◆大学4年……「どうする卒論?」
- ◆「訓点資料を読み解くのは推理小説の謎解きみたいだ」おもしろいかも。
- ◆鈴木先生に東大寺図書館に連れていってもらう。
- ◆館長の目の前で、原本調査を3回。巻物を巻き戻すのに苦勞、冷や汗もの。
- ◆鈴木先生の口癖「君、この本は読みましたか?」→「あぁあ、はい。」
- ◆そのうちに「君、この本は見ましたか?」に変化→「はい、今見えています。」
- ◆提出後、鈴木先生に「君の扱った資料の調査は、日本で君が初めてだ。それだけで十分価値がある。」と言われる。えっ、中身じゃなくて?!
- ◆いよいよ卒業
- ◆鈴木先生「君、どうしますか。もう少し上に行きますか。行くなら東京ですね。」→えっ、大学よりまだ上があるの?
- ◆親に「大学院」というのがうれしい。→「おまえ、何悪いことしたんや?」
- ◆そもそも、院入試に外国語2科目は無理無理。ドイツ語、辛うじて単位もらったのに。

ね。巻き戻す、また、広げて巻き戻して。そんなにしたら資料、傷むじゃないかと思つてらつしやつたと思うんですが。しかも夏で、エアコンもないところで、汗をぼとつと一滴でも落とそうもんなら、もうえらいことですよ。

鈴木先生の口癖は、「君、この本は読みましたか。」でした。私も今、ゼミの皆さんに同じことをしています。「君、これは読みましたか。」つてね。でも、鈴木先生の言葉はいつの間にか変化しました。「君、この本は見ましたか。」そこで、こういうバカなこと（「はい、今見えています。」）を言つたわけですが、提出後にこんなこと（「君の扱った資料は、日本で君が初めてだ。それだけで十分価値がある。」）言われました。

そうか、そういうことだったのか。初めてやったことに意味があるんだと言われて、「先生、中身を見てください。」と思わず口走りそうになりました。その中身、今ここにそれ（卒業論文）があるんですけど、現物がこれなんです。伝説の卒論。

当時はもちろん原稿用紙で、こんなのですけど、四百字詰め（の）三百十枚。古文書を扱った卒論が、ほぼ古文書状態になっているんですけれど、要するにその資料を日本で初



めて扱ったということらしいんですね。

その資料の全体を扱ったのは初めて。部分的に扱った方はいらつしやるんですけど、全体を扱ったのは初めてというわけです。

そして卒業です。

卒業を控えて、鈴木先生に言われたこと（「君、どうしますか。

もう少し上に行きますか。行くなら東京ですね。」）が、私は何のことかざつぱりわからなかつたんです。当時、大学院というのは、あまり学生の視野には入っていませんでした。親に言いました。「大学のうえにまだ何かあるのか？」父も母もですね、そんなこと（大学院の存在）は全く知りませんので、そう言われました。

大学院入試を受けますか。英語はまあ、辛うじて何とかなるにしても、ドイツ語の単位は本当に苦勞して取つたんで、無理だなどと思つてあきらめました。

#### 四 鈴木一男先生のこと

鈴木一男先生のことをお話しします。こういう方です。いかにも実直なというか、あだ名は私には言わなかつたですけど、先輩方は「パンク」と呼んでおられました。パンクっていうのは、ビーパンクチュアル、時間を守りなさいということです。私は「ぼっちゃん」と呼んでました。でもそんな感じですよ。もう本当に「ぼっちゃん」という感じなんです。

訓点語学の話はあとでします。



『奈良教育大学 国文研究と教育』  
第2号 (1978) 巻頭写真より

当時は国語科教育専任の先生がいらつしやらなくて、私  
が大学生の頃、途中でいらつ  
しやいました。一回生、二回  
生の時はいらつしやらなくて、  
鈴木先生をはじめとする国語  
学の先生、文学の先生が国語  
科教育学も国語科教育法も教  
えてくださっていました。

鈴木先生はこういうことを  
おっしゃいました。「君ね、学問はひらめきだよ。他の人と同じこ  
とを言つてちや、学問にならんよ。」鈴木先生もいろいろひらめき  
があつたみたいです。でも、そのひらめきを、実証しないと誰  
も認めてくれないね。」ともおっしゃいました。それはまあそうで  
しょうね。学問だから、単なる思いつきやひらめきだけではだめで  
しようということ、私は鈴木先生に学問の基本的なあり方をこう  
いう形で教えてもらったような気がします。

鈴木先生は生涯に一冊だけ、『初期点本論攷』という本だけ出さ  
れてお亡くなりになりました。本当はもつとたくさんの業績、資料  
をお持ちなんです、正倉院の資料を、ね。本としては一冊だけ残し  
て亡くなられました。

その正倉院の資料をノートに写していらつしやるので、そのノー  
トが絶対鈴木先生の家にはいっぱいあつたと私には記憶があるので、

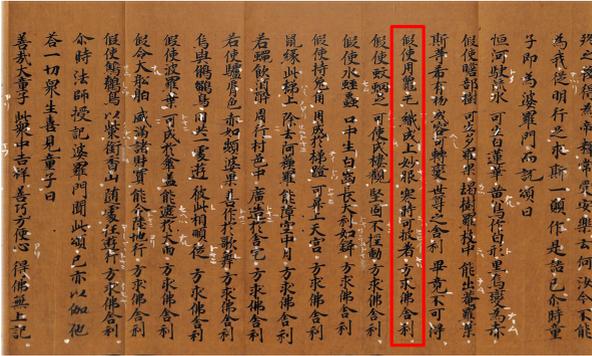
それをもう一回復刻というか、復活させられないかなと思つて、先日、鈴木先生の娘さんのお家を訪ねました。

そしたら、「ああ、ノートねえ、確かにノートありましたね。」娘さんのご主人が対応してくださったのですが、「そんなノートありましたね。あれね、五年前に親父の家を解体するときに全部捨てました。」「もうちよつと早く言つてくれたらよかつたのに、惜しいこととしましたね。」つて、

あつさり言われたので大ショックでありました。正倉院の資料で未公開未公刊の資料がそこには眠つていたんですけれども、残念ながら、それを見ることは叶いませんでした。

このように、私に学問の面白さとか、厳しさとかを教えてもらったのは、鈴木先生であります。

訓点語学という学問を先に言いましたけど、すぐく地味な学問なん



九州大学図書館蔵 金光明最勝王經平安中期点  
同図書館デジタルコレクションより

で、ちよつと我慢して聞いてください。

それはこういうものです。お経です。お経は漢文です。漢文ですから返り点や送り仮名をつけないと読めません。私が扱ったのは、平安初期から中期の資料なんですけど、こんなにきれいなお経ではなくて、もつと荒つぽく書いてありました。こういう白い点を「白点」と言いますが、白点がついてきます。これを読み解くのが、訓点語学という学問なんです。ね。

ちよつとこの部分を拡大してみますね。

こういうのを調査するときには、まずこれ(左側)、私が書いたものですけれども、自分のノートに、これを直接見て写すわけにはまいりませんので、大蔵経というお経の本があるので、それを見て写します。

そして現地に行つてこの白点をこういうふうには、赤字で書いてあるのがそれですね。このように原本から書き移す



のが移点作業です。

すごく地味な作業です。さつき言ったように、巻物を広げてひたすら写すだけです。

そして今度は写してきたものを持って帰って、これをいわゆる訓読文に直します。こういうふうには、「たとひかめ」。この点が「の」です。「けを」、ここが「を」です。これ返り点で、これ「もちひ」、「ひ」は書いてないので、補っています。

次は「ジヨウミヨウ」と読むと思いますが、これは「キモノ」と読むと思います。これ「キ」です。「キモノニオリナシ」ですね。

そしてここは音合といって音読みで読みなさいということですが、多分「カンジニ」「ヒロゲキル」。間違ってるかもしれないですね。これは「マサニ」かもしれない。この点、このへんに出てくるのは「ヨ」の点です。こういうふうには訓読文を作っていくわけです。

まことに地味な仕事であります。これを延々と続けるわけです。そうすると、当時の、これは平安中期ですけど、平安中期の文字の様子とか言葉の実態が、生の資料として見えるんですね。写本じゃないんですよ。当時のお坊さんですね、学僧が記入しているわけです。当時のそのままの日本語の姿がここに現れているわけですね。

お経って、物語なんですけど、私もずいぶんそういうのを読みましたけれど、全然御利益ミコトクはないですね。お経だから、読んだらもうちょっと人生変わってたかもしれないなと思いつながら、こういう作業をするんですよ。

そして先に何をするかという、片仮名で振り仮名（読み）がつ

けてあるので、その字体表を作ります。

そうすると、例えばこの「ホ」なんていうのは色々ありますけど、現在のカタカナに通じる字体もありますね。この「ヲ」なんかは、皆さんカタカナの「ヲ」って一、二、三画で書くってご存知ですか。二画と思ってる方、いらつしやるんじゃないですか。これを見れば明らかに三画ですよ。むしろ私はこっちの方がその起源だと。この「ゆえに」みたいな記号がその起源だと思っと思っていますけれども。

私が調べた資料には、カタカナの「ス」が、縦の一本線で記してあるんです。これ、かなり特徴のある字体なんです。だから年代の限定ができるんです。たぶん、平安中期、九五〇年から一〇〇〇年までの間ぐらいしか使われてないものなんです。なんでカタカナの「ス」が一本線かついろいろな説はありますが、

第四図 石山寺旧藏本金光明最勝王経仮名字体

ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク	ケ	コ	サ	シ	ス	セ	ソ	タ	チ	ツ	テ	ト	ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ	ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ	マ	ミ	ム	メ	モ	ヤ	リ	ル	レ	ロ	ワ	ヰ	ヱ	ヰ	ヱ
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

勝山幸人 (1984) 「金光明最勝王経の古訓法について」 『野州国文』 33, pp.1-18 による



勝山幸人 (1984) 「金光明最勝王経の古訓法について」『野州国文』33、pp.1-18による

「須」という字の一々三画です。これをスツと一本で書くから、それが「ス」だと言われているんですけど、はつきりしたことはわかりません。

それからこんなこともあります。

点がいつばいついていますよね。点を、その読み方を帰納的に類推していったら、こういうふうなことが分かります。例えば、右上につけたら「コ」とか、右の真ん中につけたら「ノ」とか、右の下につけたら「キ」とか、棒線など色々な記号があつて、それぞれに助詞とか助動詞を当てているわけです。

こういうことを延々と繰り返すわけでありまして。なんと地味な作業じゃありませんか。私の性格そのものであります。なんと地味な作業の性格を形作つたのは、まさにこれです。

さて、就職しました。これも「運命がなせるわざ」と申しましようかね。最初の赴任校は、現在の葛城市立白鳳中学校というところなんです。二上山という山が近くにありました。このてつべんに大津皇子、「万葉集」の大津皇子の墓があるんです。これがそもそも古典単元開発のきっかけであります。だから白鳳中学校に赴任しなかつたらやらなかつた。

校長先生から「ケンコックケン（県国研）」と呼ばれるところに行きなさいと言われて行つたんですが、そこで、再び巳野先生とお会いしました。そこでは、奈良県の国語学力診断問題を作る委員会に参加して、考えた問題を見せます。検討します。そして、「ここが問題だね。」という指摘に「どうしたらいいですかね。」と問うと、また、「自分で考えなさい。」。

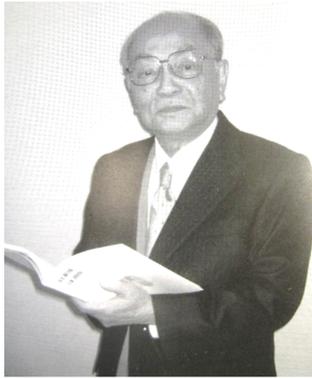
それからもう一つこういう会（奈良県国語教育研究協議会）があります。この会は、鈴木ゼミの卒業生などで作っている会なので、私は一番年下、常に会員の一番下だった。そして、公開授業をさせられたんです。

やがて附属中学校への転勤話が出てきました。巳野先生がこうおっしゃいました。「いつ誰が来ても見せられる授業をしなさいね。たった一つ、その条件だけです。あとは自由にやってください。」と言われたんです。そんなの無理に決まっています。実は行つてみたらそうではなくて、附属中学校には昨日もちよつと申しましたけども、授業は毎日のことではありますが、それ以外に研究会があり、実習指導があり、入試作問があり、いわゆる附属校ならではの仕事がある。

いっばいふりかかってくるので、本当に鍛えられましたね。曰野先生は、その仕事も大事だよっておっしゃった。そしてその後、これ（頼まれた仕事は断つてはいけない）もおっしゃった。断れないですよ。

附属中学校で初めて公開授業をしました。語彙指導をしました。授業後、大学の先生がこういわれました。授業が終わってすぐに、「ん、もう一つだなあ。」

## 五 曰野欣一先生のこと



『曰野欣一先生喜寿記念国語科教育論集』（2007）巻頭写真より

曰野欣一先生のことをお話しします。

附属中学校で長くお勤めでありました。こういう方です。鈴木先生と雰囲気が似て、謹厳実直と言いますかね。それを絵に描いたような先生であります。こういうことをおっしゃいました。

「国語科の本質は、子どもに言葉の力をつけることですよ。それを外したら国語の授業じゃありませんよ。」とおっしゃったんです

ね。

それから、こういうこともおっしゃいました。曰野先生に教えを受けた者は、「断続」という言葉を合言葉にしています。「継続は力なり」と言いますが、世の中、そんなにうまく続けられるわけがない。時には、例えば現場であれば、生徒指導で忙しくて、研究どころではないこともある。私もそういう現場がありました。

「でもね、問題意識を常に持つていないとだめだよ。必ずできる時が来るからね。断続の精神だよ。」とおっしゃったんですね。これは私たちにとって非常に励ましになりました。

また、曰野先生は、授業をする際の教材研究にあたって、文献資料は徹底して読まれました。

しかし、それをそのままでは授業におろせません。中学生ですから、中学生向けにどうやって昇華していくかということも教えてもらいました。曰野先生の書かれたものは山ほどありますが、先ほどご紹介いただきましたこの著作集（『曰野欣一著作集』）に、いろいろな雑誌などをまとめて整理しました。

鈴木先生と曰野先生との関係は、と申しますと、曰野先生は鈴木先生の最初の指導学生。そして、私は鈴木先生の最後の指導学生。因縁と言ったらおかしいですけど、不思議な関係ですね。

そんなことで、私ここまで歩いてきたわけでありませうけれども、人生にはそういう節目というのか、そういう機会が必ず訪れて、そこでの判断は間違っていないかと思うんです。なぜなら、そのと

き精一杯の判断をしているので全然問題ないんですけども、不思議だなど。あのときの中学生、国語なんか嫌いやと思っていた中学生が、それを生業にしているんですから、おかしな話ですよ。

## 六 私の単元開発①〜「言語単元」の場合〜

さて、ここからは後半の話になります。だいたいいい感じで時間が過ぎていきますね。

私の単元の発想は、一つは、「言語単元」と呼ばれているものがあります。これは、題材は言語なんです。題材は言語なんですが、能力としては表現能力をつける、表現単元なんです。

二つ目が、「郷土に関わる単元」です。例えば、こういう総合単元、「ふるさとを見つめる」奈良、現在・過去・そして未来」などというかつこいいタイトルをつけています。

それから三つ目は、「古典単元」です。教科書の古典の教材単元が最近は本当につまらなくなってきた、「徒然草」なんか第五十二段しか載っていないという、情けない状況になってきていますけれども、なんとか開発したいと思っ

### 単元とは

- unitの訳語。学習活動の区分やまとり。
- 教材単元と経験単元。

### 単元開発の視点

**国語科指導の本質をはずさない。**

**本質とは、**

- 子どもたちに「ことばの力」を付けること。
- 教育的価値(人間陶冶的価値)を有していること。

**「面白ければ何でもいい」というわけにはいかない。**

たんですね。

例えば、「連作二上万葉」。これが最初の赴任校とつながってくるわけです。

それから富山大学在職中には「越中万葉」という単元開発をしました。

言語単元については別紙の資料1をご覧くださいますと、小学校から高校までこんな単元開発ができるよ、という一例を示しております。

教科書以外の単元を開発しますので、やっぱりどうしても守らなきゃならないというか、絶対外してはいけないことがある。

これはさっき言いました、これです。これはこう(子どもたちに「ことばの力」付けること)、それからこう(教育的価値を有していること)、これがなければだめだと思いますね。

だからちっちゃい字で書きましたけれども、面白ければ何でもいい、子どもが喜ぶからいいんだ、ということでは絶対ないと思います。そこは教師の責任でもって、きちつと選択をしないとイケない。子どもたちが面白がつてわいわいやるから、それでいいんだというのは、やっぱりそれはプロの教師としてはだめなんだと私は思っています。

この二つは絶対守りたいと思っていました。

「言語」を題材とする表現単元例配当案一覧(小学校・初級、小学校・上級、中学校、高等学校)(◎＝各段階でぜひ実施したい単元)					
系列・単元数	小学校・初級(音5・作2)	小学校・上級(音8・作5)	中学校(音7・作6)	高等学校(音5・作6)	
A	ことばで遊ぶ系列 6 小初2 小上2 中1 高1	【ゲーム→語説明】 ◎よく似た字・ひらがな 【ゲーム→語説明】 ◎ひらがなとカタカナ	【作字→語解説】 ◎感字を創ろう 【語説明→語解説】 ◎「か」って?	【創作】 ◎君も名作家 -作家の文体をまねる- 【語説明文】 ◎文学の手	
B	ことばの仲間を考える系列 9 小初2 小上2 中3 高2	【語説明文】 ◎なまの漢字 【語発表】 ◎カタカナことばをあつめよう	【語報告】 ◎きみは漢字はかせ 【語説明文】 ◎なまのことば	【語解説文】 ◎ニギルとツカムはどうちがう? 【語話し合い→レポート】 ◎擬音語・擬態語の不思議な世界 【語説明文】 ◎雨の名前	【語報告文】 ◎心の世界を表すことば 【語感想】 ◎□(季節名)を感じることば
C	ことばのきまりを考える系列 5 小初0 小上2 中2 高1		【語説明文】 ◎～辞典の使い方 【語話し合い→語意見文】 ◎漢字がないと……	【語説明】 ◎笑ったのは誰? - 「」の役割 - 【語説明文】 ◎昔、昔おじいさんとおばあさん□ありました - 「が」「は」 -	【語説明】 ◎はたるは何処に? - 「に」「へ」「を」 -
D	ことばの生活を考える系列 17 小初3 小上2 中5 高4	【語発表】 ◎みふりとことば 【語話し合い】 ◎あいさつしらべ 【語記録文】 ◎絵文字とくらし	【語報告】 ◎看板の字・新聞の字 【語報告文】 ◎コマースルのことば 【語話し合い→語意見文】 ◎今どきの流行語 【語説明文】 ◎郷土(奈良)の方言 【語対話】 ◎ていねいに言うには	【語報告】 ◎ちょっと気になるこんな日本語 【語レポート】 ◎「ら抜きことば」を考える 【語説明文・意見文】 ◎◆弁(関西弁)を考える 【語ダイアット】 ◎電話と手紙 【語対話】 ◎敬語を使ってみよう	【語報告→語意見文】 ◎外来語の乱暴・反乱 【語レポート】 ◎文字の印象 【語説明→語意見文】 ◎あなは「組」[VERY] -若者ことばいろいろ- 【語ダイアット→語意見文】 ◎ワープロと手書き
E	ことばの歴史を考える系列 7 小初0 小上2 中2 高3		【語説明文】 ◎ひらがな・カタカナ誕生の秘密 【語解説】 ◎昔の言い方、今の言い方	【語説明】 ◎五十音図の謎 -五十音図は50音か- 【語レポート】 ◎「おとない」の意味変化	【語解説文】 ◎「いはいはにへと」の意味 【語レポート】 ◎歴史的仮名遣いと現代仮名遣い 【語研究報告】 ◎日本語の特色

資料1 言語単元一覧表

今から言語単元についてお話しします。

言語単元の発想というのは、私は先ほど見たように、当時国語学ですが、自分が国語学を専攻していたというところに源はあると思います。

言葉のことを子どもが考えること、つまり、表現の題材とするこの意義は大きいと思うんですね。その意義はいくつかありますが、国語教師としては日本語に関する関心や興味を持つてほしいという気持ちがありますし、それから言葉と文化は結びついていますから、やっぱりそういう文化との関係を考えてほしいなという思いがあります。それから、何気なく子どもたちは言葉を使っていますが、それを意識化させたいという気持ちもありました。国語科なので当然のことだと思いません。

それから、意外と子どもたちは言葉に対する関心が高い。これは不思議なんですけど、あとで「ら抜き言葉」の話をしませうけどね、「ら抜き言葉」のことを考えてみるかと言ったら、初めは、子どもたちは「何それっ」て感じですよ。 「ら抜き言葉」ってなんで、って話ですよ。

でも、勉強しているうちに、わたしたち、それを普通に使っているけど、って話になってくるわけですね。とても関心が高いなと思えました。

言語単元は何か特別な経験がないとできないということではない。言語ですので、子どもたちには普遍的に、日常的に言葉を使っているわけですよ。だから、特殊な経験がいらないうわけですよ。

それから、国語の教師だから、そういうことに関しては一応資料とか知識は持っているはずであります。だから準備も、例えば、環境問題について意見文を書こうと言われても、環境問題がまず、そもそも何か、自分は分かっているし、そんな深く学んだわけではない。それに比べればまだまだですよ。

そんな理由です、言語を題材にするというのは。ただし、先ほど言ったように言語を題材にしているけれど、表現能力を養う単元です。そこは間違わないでください。

そういう単元を作ったときに気をつけなきゃならないこと。やっぱりあくまでも子どもたちの言語生活から題材を持ってこなければなりません。子どもたちの生活とかけ離れたものを持ってきて、子どもには遠い存在になってしまいます。

それから当然、中学生が言語分析をするにあたっては限界がありますから、その言語処理の方法をやっぱり先生が示してやらないとだめだと思います。例えば、意味を比べるにしても、そういう観点で比べたらいいのかとか教えないとできません。

それから、もう絶対これです。子どもたちが調べたり考えたりする時間を保証してやることです。それがなければ、単なる教え込みになってしまいます。

一応、こういう指導モデル、指導過程と言ってもいいと思います。が、こういう指導過程を考えましたけれども、これは一方通行ではなくて、当然、並行したり、ひっくり返ることもあります。

たださっき言ったように、①②というのは結構大事なんです。

#### 言語単元の指導過程モデル

- ① 課題や疑問の発見・提示
- ② 日常の言語生活の振り返り
- ③ 言語現象についての調査・分析・考察
- ④ 調査・分析・考察の表現化
- ⑤ 自分の言語生活への活用・応用

逆行・並行も  
ありうる。



自分の生活を振り返ってみてこんな問題あるでしょう、これどうなっているのでしょうか、という問題意識ですよ。

具体的に説明します。「ら抜き言葉」を題材としたパネルディスカッションという単元です。そのとき使った資料をこれからお見せしますが、皆さんの手元にはありません。

まずは、新聞記事ですね。よくぞ集めているね、と思いませんか。

『見れる』でもいいのか。この新聞記事はかなり批判的に書いています。これは七年後ですかね。『見れる』に思う表現の乱れ、まあ、批判的に

また八年後。これは総理府の調査かな、こういう新聞記事が出てきます。そしてこれは国語審議会ですかね、こんな記事が出てきます。こんな記事を見ていると、じゃあ、みんなの生活で「ら抜き言葉」はどうなっているという話になるわけですね。この資料が、よくもよくもこんなに延々と集めているという感じです。

これ、先日の六月十一日に載った天声人語です。「ボロクソに褒められちゃったんだ。」「前髪の治安が悪い」「気分を上げ上げ。」「前



「国語学習の記録」の「黒板の記録」です。「国語学習の記録」って何やという話は、また一時間かかりますのでしませんが、生徒が輪番で毎時間記録を取っているものですが、これを黒板にこういうふう書いて、分かったこと、分かることを示しています。

こうやって自分の生活の中の言葉の問題を、反省というか、振り返らせます。

次に、今度はそれをどうするという話です。これはワークシートですが、学習プリントと私は呼んでいます。さきほどの「ら抜き言葉」の使用実態についていろいろな意見を交換します。

パネルディスカッションに入る前に、グループディスカッションをさせるわけですね。

次に、これがパネルディスカッションの台本です。

これなんかは、大村はまがこういうことをやっていますけれども、パネルディスカッションの台本を作って、中身は変わるけれども、このとおりやってごらんと、パネルディスカッションの型を教えるわけですね。

### 言語単元の指導過程モデル

- ① 課題や疑問の発見・提示
- ② 日常の言語生活の振り返り
- ③ 言語現象についての調査・分析・考察
- ④ 調査・分析・考察の表現化
- ⑤ 自分の言語生活への活用・応用

逆行・並行も  
ありうる。

ここは調査分析。これはどうやって表現するか、表現の仕方を教えないと、パネルディスカッションもできないわけであります。

次に、これ最後、単元の最後に何をしたかというところ、自分の言語生活にどう今の学習を応用しますか、活用しますかということ、実はこここのところですが、拡大しますとこう書いています。

「今、あなたはら抜き言葉とどのように付き合っていけばよいと考えていますか、あなたの感想を書いてください。意見を書いてください」というふうに、最後、自分の言語生活に戻していきます。

自分の言語生活から出発して、それをいろいろ考えて最後は自分の言語生活に戻ってくるわけです。そういう単元の仕組みです。これがないと単なる知識に終わると思うんですね。単なる知識に終わって、自分の言語生活を振り返るということにはあまりならないと思います。

### 七 私単元開発②「郷土の古典単元」の場合

では、今度は郷土の単元開発についても、ちよつとだけ例をお示しします。

まず、やっぱり教科書以外の単元を持ち込むので、そこには価値がなければいけません。彼らの人間的成長に資する内容が欲しい。これは絶対です。当然、発達段階も考えます。

例えば「万葉集」の教科書の教材は、羅列というか、何の関連もなく並んでいるように見えるんですが、どうでしょうか。そこで

テーマ性とか連続性を大事にします。

それから、当然、言語抵抗がありますけれども、それはそれぞれの学年に合ったような題材も必要です。結局それを読ませるのも、古典を読む力を付けたいためにやっているわけであって、単にお楽しみでやっているわけではありません。

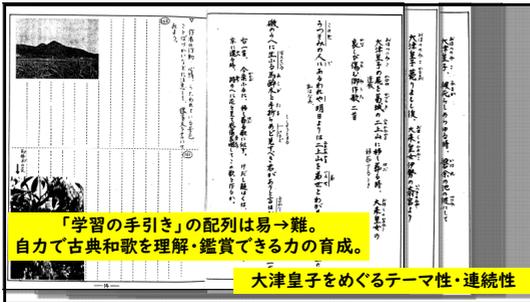
そして当然のことながら、教材を作るわけですから、作りやすくなくてはいけません。自分が、興味がなかったらだめですけど。ちょっと一つ紹介します。

これ、「二上万葉」という教材集です。このへんは関係年表ですね。

さつき言った二上山のてっぺんには大津皇子という人のお墓があるとされています。勤めた中学校は目の前に二上山があるので、これだと思つて大津皇子に関わる歌、連作と言つてもいいと思いますが、それを集めて教材化しました。

こういうふうには筆ペンで書いて雰囲気を出しながら、しかもここに「学習の手引き」が、学習課題かな、学習課題がありますけれども、それを付けています。

実は、学習課題も大津皇子、大津



皇子、大津皇子、大津皇子で、ずっと通しているんですね。こういうふうには、これが学校から見えてるんですよ。子どもたちは全く知らないんです。二上山のてっぺんに大津皇子のお墓があるよって。誰それって。でも、ここひとつとしたら大津皇子が歩いてたかもしれんぞとすると、「うわっ」といつぺんに古典が近づいてくわけですね。こういうふうにして当然読めないから「学習の手引き」をつけてありますが、この「学習の手引き」の付け方がまた難しい。

やつぱり優しいものから難しいものへ、最終的には自力で古典を読解鑑賞できる、理解、鑑賞できる力の育成をねらいますが、順番があります。

こちら（前）の方が当然、親切に、この言葉に注目してごらん、どの言葉に注目してごらんって書いてあります。

だんだん自力で考えさせます。こういう言葉があるけどね、という指摘。最後は自分で考えなさい、になつていきますね。

教材集というのは、単に並べただけのものでもなくて、その構成の仕方でも考えなくてはなりません。

それから、これは面白いと思いませんか。万葉集の歌を現代詩に書き換える作業です。例を示してあります。なかなかシャレた子がいいます。中学生ね。いろんな能力を持っていますね。

あとは新聞記事もこうやっていけばいいためにおきます。田辺聖子の『文車日記』も参考資料としています。

歌碑がいっぱい大和にはあるので、そういうのも新聞記事、今は

いっぱいデータベースありますけどね。当時はこういう風に新聞記事を書きます。というふうにして、教材集を作っていきます。

なんて言うでしょうかね。ものすごくシンプルに言い換えたら、好きだからできるんですよね。新聞記事だって、皆さんスクラップしたことありますか？ めんどくさいんですよ。スクラップつてね。ピリッと破つて箱に入れておくことです。ひと月まとめて、きれいにしましょう。ピリッと破つて箱に入れておいたら、それでいいですよ。

このように先ほどの言語単元にしても、古典単元にしても、やっぱりまずこれ（資料収集の不断の努力）ですよ。これがなければ、こういう教材集はできないと思います。

そして資料の読み込み。例えば大津皇子の万葉歌を扱うにあたって、大津皇子ってどんな人だったのか、なぜ自害しなきゃならなかったのか。そこにはどういう策略があったのか、いろんな研究物が出てくるわけですから、それは子どもに教えるかどうかは別として、教師は読んでおかないと無理ですね。

それから、いざ指導の段階になる

#### 単元開発に必要な指導者の努力

##### 【素材の研究】

- 資料収集の不断（普段）の努力
- 徹底した資料（研究成果）の読み込み

##### 【指導的研究】

- 教材化の研究—教材集・学習の手引き（発問）の作成
- 学習課題の設定

##### 【反省的研究】

- 学習者の反応に基づく教材性の吟味・反省
- 教材の改訂（加除修正）→次の実践への計画・準備

とどうやって「学習の手引き」を作っていくか、課題を設定していくかという問題があります。

そして、これが大事なんですけど、自分が作った単元なので、子どもがどんな反応をしているか、やっぱり知りたい。これがやっぱり、その単元の良し悪しを測るバロメーターになると思うんですよ。子どもがどんな反応をしたか。早い話、子どもが面白かったと言ってくれるのか、分かんかったと言ってしまうのか、そこですよ。そして、次への計画もしなきゃならないということになります。

単元開発というのは面白いんですけど、学生の皆さんは教職にいたら、十年ぐらいは我慢してください。十年たったら試みてください。十年たったら教科書だけでは満足できなくなるからやったらいいと思います。十年は我慢して教科書をまずはきちつと教えることを考えてください。

— こんなこと言うと、教科書を離れるように受け取られますが、そんなことはありません。教科書は主たる教材でありますから使ってください。ただ、教科書以外のものも、子どもに、それで言葉の力をつくんだったら、いいじゃないですか。

そういう意味ですよ。

決して、教科書を使うなと言っていないですよ。だいたい、七、八割は教科書です。効果があると思つてやつてるんですよ。これはね。

## 八 四十八年間追い求めてきたこと

もう時間が来ましたので、守らないといけません。最後に、資料にはありません。パワポにはありますけど、資料にはありません。

私は今年度で四十八年間、教職を務めましたけれども、何を追い求めてきたのかな、と改めて考えてみました。

結局はこれだなと。実践理論の構築。実践理論って何ですかって話ですよ。

まず、根本的に私にはこういう考え方があります。教育は科学だと。科学である以上、再現性がなかったらだめだと。私がやったことを、他の先生がやっても効果があるという再現性がなかったらだめ。これは別に教育科学だけじゃなくて、自然科学でも一緒です。実験したら、必ず、それを再現して、なるほどそういう結果が出るよねという再現性が大事ですよ。

ところが、授業というのは、その場かぎりの一度きりのものであります。ならば、やっぱり理論化がいる

### 48年間追い求めたのは……

#### 「実践理論」の構築

- 「教育」は「科学」である。「科学」ならば、「再現可能性」が必須。
- しかし、「教育実践」は、その場限りの一度きり。
- ならば、理論化が必要。理論化することで、汎用性や一般化が期待できる。
- そこに、実践に基づく理論の意義と必要性がある。
- すなわち、「実践理論」の構築である。

48年間のひとごと

「努力は必ず報われる」とは言うけれど、  
本当は「報われるまで努力してるんだよな」。

んじゃない、ということですよ。理論化すれば、汎用性、一般化が期待できるということになります。

そこに、実践に基づく理論の意義と必要性とがある。つまり、実践に基づいて、実際にやってみて、子どもの反応をとってみて、なるほどね、それはやっぱり効果あるよねと、子どもに非常に力が付いた、興味を湧かせてくれた。そういうことがあったら、やっぱりそれは、可能性はあるということになります。それをやっぱり理論化しないといけない。

私の先ほどの履歴を見ていただくと、半分は中学校の実践の現場なんです。半分は大学での研究生生活なんです。途中で教育行政が五年間ありますけれども、この実践したことを大学でやっぱり理論化するのが自分の仕事だったなと、今思ってみるとそう思います。

これが実践理論。だから、実践理論なのであって、単なる理論じゃないんです。実践に基づく、実践から導かれる理論なんです。

それはひよつとしたら、言われている理論と違うかもしれないけれども、それは実践に基づいているから、違う可能性もあるかもしれないですね。

そんなふうに四十八年間、自分はやってきたんだろうなというふうに、改めて冷静に考えてみると、そういうふうにあります。

じゃあ、もう最後です。もうこれでお別れの言葉でございます。ひとりごとです。ご注意ください。

ちよつと自慢げで嫌ですね。でもそうじゃないですかね。

努力は必ず報われるって言うけど、いや、報われるまで努力して

るんだよねと言いたくなるよね。

ということ、四十八年間の総括がこれかよ、と言われたら、これです、と言わざるを得ません。

時間が参りましたので、ぼちぼち終わりにしようと思います。すみません。もう手を叩こうと思つて待つていらつしやる方、ごめんなさいね。

あと九か月ほどここですけれども、自分が実践を通して学んだことを、とにかく学生の皆さんには余すことなく伝えたいと思つています。もうそこは出し惜しみすることなく、伝えたいと思つていきますので、あと数か月の命、頑張ります。

ということ、結局こういう実践をしてこられたのも、まずそのつまらない授業を受けてくれた子どもたち、もうどれぐらいいるんでしょうかね。学生さんがいるからこそですよ。

そして当然のことながら、先輩の先生方、同僚の先生方、研究仲間の先生方がいらつしやつたから、私が今ここにいるんだと思いますし、家族もよく我慢してくれたなと思つています。やつぱりもう最終的には感謝しかないなと思ふんですね。

では、これにて私の漫談は終わりにしようと思ひます。

どうもご清聴ありがとうございました。

〔付記〕本講演録は、二〇二三年六月十七日に、奈良教育大学国文学会で行つた講演に加筆修正したものである。